

# 史書にみる倭国の繊維類とその原料について

メモ) 鉄本 2024.07.01



## 1. 古代の史書に出てくる繊維類の名称

### (1) 『後漢書』にみる繊維類

- ①「麻紵」 読み: まちよ 『魏志倭人伝』では「紵麻」と文字が逆転している。  
 「麻」と「紵」はそれぞれ別のもので、「麻」は「大麻」を原料とした繊維であり、  
 「紵」は、カラムシのことで、別名で「苧麻(ちよま)」とも表記する。

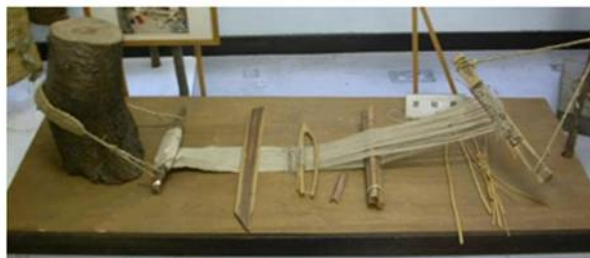
大麻(アサ)	苧麻/カラムシ
<p>[形状] アサ科の一年草。 高さは1~3m。 茎は四角で真直ぐに立つ。 葉は細長く、3~9枚(奇数)の小葉が集まって手のひら状になる。</p> <p>[特徴] 茎から得る繊維は、強靱で、弾性が強く、耐水、耐久性に優れる。織物、網、糸などに利用される。種子や葉から麻酔物質が採れる。</p> 	<p>[形状] イラクサ科の多年草。 高さは1~2m。茎は木質。 葉は広卵形で先が尖る。</p> <p>[特徴] 茎から得るセルロースは天然繊維の中でも最も涼しい素材と言われ、通気性・吸湿性・耐久性に優れる。葉はミネラル豊富で食用となる。</p> 

- ②「蚕桑」 読み: さんそう  
 原本では「蚕」に「蠶(さん)=蚕の俗字」が当てられている。

蚕	桑
 <p>[生糸獲得までのプロセス] 成虫は約500個の卵を産み、約18日で5齢の蚕となり約8日後には繭を作り始める。3日間で繭が完成し生糸に加工される。(繁殖用蚕は羽化まで飼育) ★絹織物1反(700g)作るには、桑葉が約98kg、蚕が2700頭(蚕の数詞は「頭」、繭が2600個必要。1個の繭から長さ1300mの繭糸が採れる。</p>	<p>[形状] クワ科の落葉高木クワ類の総称。樹皮は淡褐色、葉は深い切れ込みがあるものと全縁のものがある。被子植物。実は初夏に熟し食用となる。葉は、蚕の食草として重要。</p> <p>[特徴] 北海道から九州まで広く分布し、ヤマゲワ(山桑)、カラグワ(唐桑)、ロソウ(魯桑)の3種を原種として100種を超える品種が栽培されている。</p> 

- ③「縑布」 読み: けんぷ 「縑」とは、「かとりぎぬ」=より合わせた糸で堅く織った平織の絹布のこと。  
 「かたおり(固織)」が変化した語。 対義語は、「繩(あしぎぬ)」で、<sup>あ</sup>悪し絹の意である。  
 平織は、経(たて)糸と緯(よこ)糸を1本ずつ交差させて織っていく、最も基本的な織り方。




古墳時代の織機(復元)  
 出典: 東京農工大学  
 付属繊維博物館




平織り

(2)『魏志倭人伝』にみる繊維類

- ①「木綿」 読み:ゆう(もめん) 「綿」は、「綿」の正字。ここでいう「木綿」は、現代の木綿とは異なる。  
 日本に木綿が到来したのは799年(延暦18)と言われているが栽培技術が伴わず絶滅した。  
 その後、室町時代になって、朝鮮から伝来し全国に広がった。  
 『魏志倭人伝』でいう「木綿」は、「ゆう」のことで、楮(こうぞ)や梶(カジ)などの樹皮を剥いて、蒸す、  
 水にひたすなどの処理を行って繊維部分を取り出したものである。和紙の原料でもある。  
 中国には古から木綿(もめん)があったので、渡来した中国人が「ゆう」を木綿とも誤ったという  
 見方がある。(京都工芸繊維大学名誉教授・日本海文化研究所所長 布目順郎氏の見方)

楮(こうぞ)	梶(かじ)
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>[形状] クワ科の落葉樹。高さは6m程度になる。葉は先が尖った卵型。縁には鋸歯がある。雌雄同株で初夏に赤く熟した果実が生食できる。 [特徴]西日本の山地に自生。樹皮は和紙の原料。</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="810 622 1098 981"> <p>[形状] クワ科の落葉高木。高さは10m以上になる。若木の葉は掌状に深く、3~5裂。雌雄異株。 [特徴] 関東以西に自生する。和紙の原料となるが、品質は楮より劣る。葉には墨がよくのり、古には葉に歌を書いた。神事との関係も深く家紋にもされている。</p> </div>  </div>

- ②「紵麻」 読み:ちよま 前項(1)-①を参照  
 ③「蚕桑」 読み:さんそう 前項(1)-②を参照  
 ④「細紵」 読み:さいちよ 苧麻(いちび)や紵(からむし)で細密に織った「ほそい麻の布」を表す。

苧麻(いちび)	麻(あさ)
<p>[形状] アオイ科の一年草。インド・西アジア原産。高さは1m程度。心臓形の葉が互生する。全体に軟毛が密生。夏に黄色5弁の花が咲く。 [特徴] 葉・茎の繊維から、ロープ、糸、粗布、麻袋を作る。ボウマ(苧麻)、キリアサ(桐麻)ともいう。種の皮は硬く20年以上発芽能力がある。現在は利用されず畑に害をなす雑草として扱われる。</p> 	<p>「麻」は、大麻(たいま)、苧麻(ちよま/からむし)、黄麻(こうま)、亜麻(あま)、マニラ麻などの総称である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茎の韌皮(じんぴ)から繊維をとる麻: ⇒亜麻、苧麻、黄麻</li> <li>・葉から繊維を採る麻: ⇒マニラ麻、サイザル麻(アサ科とは別の科)</li> <li>・黄麻 ⇒ ジュート繊維の原料</li> <li>・亜麻⇒リネン製品、亜麻仁油(あまにゆ)</li> </ul>

- ⑤「縑」 読み:けん 「かとりぎぬ」のこと。 前項(1)-③を参照  
 「縑」は、「平絹」のうちの高級品である。併糸(あわせいと)は平絹に見られる技術で、中国では併糸で織った平絹を「縑」と呼んでいる。「縑」は、紙として利用した帛布(はくふ)に用いられた。  
 \*併糸とは; 2本以上の糸を縊り合わせて、1本の縊り糸にしたもの。  
 ⑥「緜」 読み:めん 前項(2)-①を参照  
 ⑦「班布」 読み:はんぷ 「木綿(ゆう)」の布、サラサの類 新井白石は倭文(しどり)と解釈している。

「班」を「斑」に通じることから、経糸又は緯糸に若干の色糸を使った縞文様の布で、大麻布、苧麻布など植物性の布が考えられる。

⑧「倭錦」 読み:わきん 日本で織られた錦、或いは、中国から見れば粗雑な錦であろうとされている。

⑨「絳青縑」 読み:こうせいけん 赤と青の絹糸をそれぞれ縦糸と横糸にして織った布

「絳」は、濃い赤色、深紅色のこと。旁(「絳」の右側)の部分が紅に通ず。

「縑」は、高級な「平絹」のこと。前項(2)-⑤を参照

⑩「緜衣」 読み:めんい 真綿を入れた衣服 真綿はくず繭を平面状に引き伸ばして綿のようにしたもの。

繭の25%程度は屑物になり、綿として利用される。防寒用に適している。

⑪「帛布」 読み:はくい 「帛」は、きぬ、うすぎぬ、しろぎぬのことで、絹織物の総称。

### (3)『日本書紀』等に出現する繊維及びその原料に関連する言葉

#### A.「縑」(けん)の出現箇所

##### ①神功皇后紀 9年10月

・新羅からの貢ぎ物; 「仍齎金銀彩色及**綾・羅・縑絹**、載于八十艘船」

「綾」=5世紀後半に伝来。経糸(たていと)に緯糸(よこいと)を斜めにかけて模様を織り出した絹

「羅」=7世紀頃までに技術が伝来。うすぎぬ。薄く織った絹の布

##### ②仁徳天皇紀 40年2月

・機織り女の歌; 「時爲皇女織**縑**女人等歌之曰」

##### ③雄略天皇紀 15年

・秦氏による租税の献上(うずまさの語源); 「奉獻庸調**絹縑**、充積朝庭、因賜姓曰**禹豆麻佐**」

#### B.「紵」(ちよ)の出現箇所

##### ①持統天皇紀 7年3月

・全国に殖産の勅命; 「詔令天下、勸殖**桑紵**梨栗**蕪菁**等草木、以助五穀」

(参考)「蕪菁」=にら、かぶら

#### C.「木綿」(ゆう)の出現箇所 \*「緜」の出現はない

##### ①神代上/下

・天の岩戸の場面; 「粟國忌部遠祖天日鷲所作**木綿**」

・神々の役目; 「天目一箇神爲作金者、天日鷲神爲作**木綿**者、櫛明玉神爲作玉者」

「天目一箇神」=鍛冶の役 「天日鷲神」=布を作る役 「櫛明玉神」=玉造りの役

(あめのまひとつのかみ)

(あめのひわしのかみ)

(くしあかるたまのかみ)

##### ②允恭天皇紀 4年9月

・盟神探湯の場面; 「於是諸人、各著**木綿**手纏而赴釜探湯、則得實者自全」

「手纏」=襷(たすき)のこと 「纏」の読みはキョウ。字義は、なわ、背負い帯。

##### ③皇極天皇紀 2年2月 及び 3年6月

・巫女たちによる神霊の言葉; 「國內巫覡等、折取枝葉、懸掛**木綿**、伺候大臣渡橋之時」

・同上(内容同一); 「是月、國內巫覡等、折取枝葉、懸掛**木綿**、伺大臣渡橋之時」

D.「桑」(そう／くわ)

①神代上

・蚕と桑の出現；「娶埴山姫、生稚産靈、此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀」

②景行天皇紀 40年6月

・日本武尊による熊襲征伐；「或聚黨類、而犯邊堺、或伺農桑、以略人民」

「農桑(のうそう)」＝農耕と養蚕のこと

③雄略天皇紀 6年3月

・養蚕の勅命；「天皇、欲使后妃親桑以勸蠶事、爰命螺贏聚國內蠶」

「蠶(さん)」＝蚕の俗字 螺贏(すがる)＝人名 (雄略紀の豪族 少子部(ちいさこべ)連)

・桑の適地を選定；「宜桑國縣殖桑、又散遷秦民、使獻庸調」

④全体に「桑」に関する用語が多数出現。

・農耕関連；「農桑」、「桑梓(そうし:故郷の意)」、「殖桑」など

・地名関連；丹波國桑田村(現亀岡市とその周辺地)、上桑原/下桑原(現高槻市三島付近)、桑津邑(現伊丹市)、桑名郡(現桑名市)

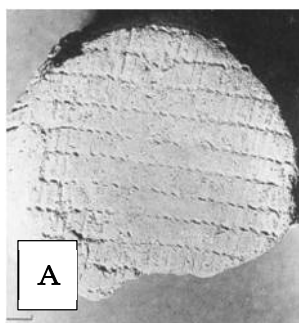
・人名関連；桑田玖賀媛(仁徳天皇紀16年)、桑田皇女(敏達天皇紀4年 敏達天皇皇女)

2. 遺跡から出土した繊維類

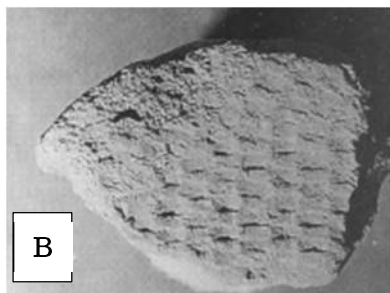
(1) 縄文土器面の網目圧痕(繊維痕跡)

① 境A遺跡出土土器底面の網目圧痕例

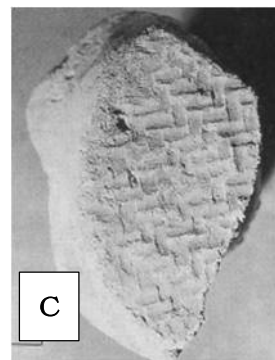
境A遺跡(富山県朝日町)は、縄文時代中期から晩期(約 4800～2500 年前)の集落遺跡。ヒスイ製玉類、磨製石斧、縄文土器が出土している。縄文土器に残された圧痕を観察すると、編目圧痕のものが多く、織目文(布目文ともいう)の土器も少数あることがわかる。(下図・表を参照)



A=アングイン様編目文



B=平織文



C=網代文

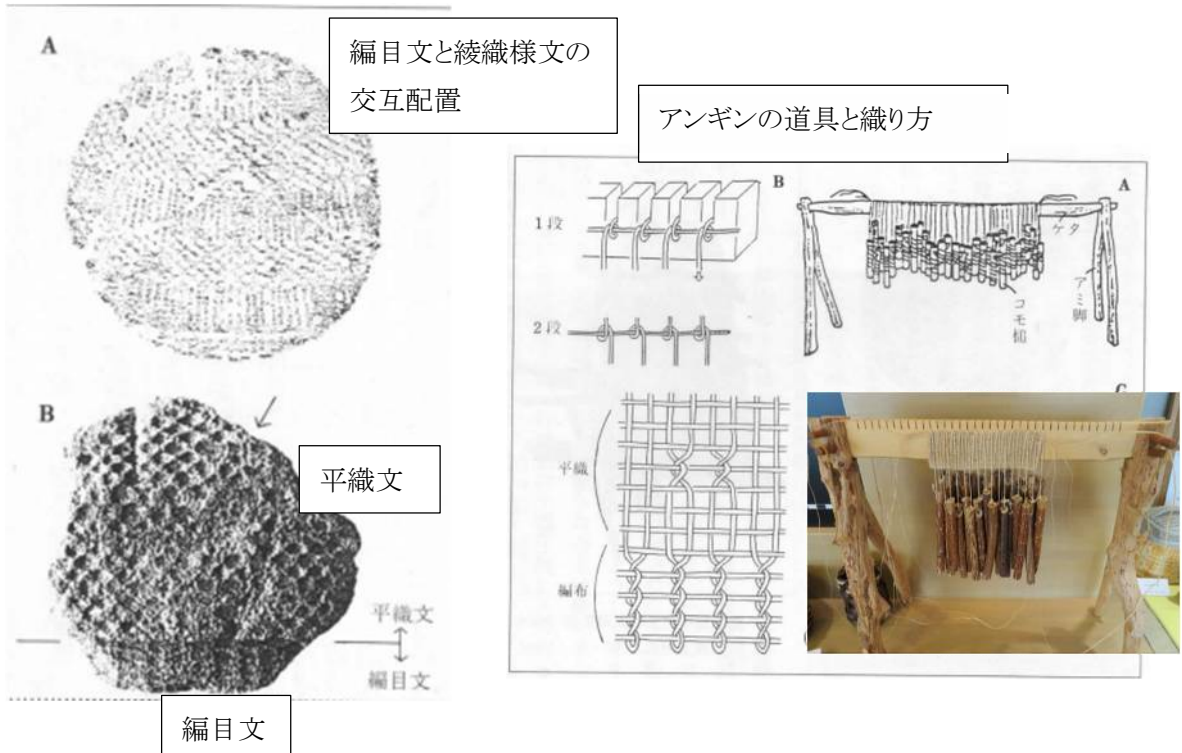
編・織目文の種類	土器片の数	比率(%)
1. アングイン様編目文	69点	51.9
2. 網代文	緯綾文	40点
	山形綾文	4点
	その他	5点
3. 平織文	14点	10.5
4. その他	1点	0.8
合計	133点	100.0

出典：『倭人の絹 弥生時代の織物文化』 布目順郎 小学館 1995 より抜粋し、一部加筆

②「編み」から「織り」への技術革新 ～アンギン編み～

縄文晩期には、「編み」から「織り」への技術革新が進んでいる様相を示すものも発見されている。山形県谷地前遺跡(下図A)、千葉県香取郡山田町姥神遺跡(下図B)からは、編目文と織目文が混在したのも発見されている。

「編み」と「織り」を1枚の布の中で、交互に変化できる織機として、「アンギン編機」の存在がある。縄文時代のアンギン様編物の実物が東北・北海道の各地から出ており、下図右のような機具を使用して作成したことが推定される。



アンギン編機は作業効率が悪いので、弥生時代には織物の技術革新となる「バトウオビ織機」が使用されている。(これは、経糸を奇数糸と偶数糸に分けて上下に開口させ、緯糸を通しやすくした機具。1頁の織機の写真を参照)

(2) 弥生遺跡からの絹の出土例

弥生遺跡出土の絹は、北部九州に偏重しており、本州、四国、南九州からの絹出土例はない。この理由について、明確な理由は不明であるが当時一定の高い品質が得られていた麻織物に比べ、養蚕は手間暇がかかり、絹織り技術も稚拙だったことにより、北部九州以外では進んで技術を探り入れられなかったことが考えられる。



- 弥生前期
  - ① 福岡市早良区有田遺跡(前期末)
- 弥生中期
  - ② 福岡市西区吉武高木遺跡(中期初頭)
  - ③ 福岡市博多区比恵遺跡(中期前半)
  - ④ 福岡県甘木市栗山遺跡(中期前半および後半)
  - ⑤ 佐賀県神埼郡神埼町朝日北遺跡(中期中葉)
  - ⑥ 福岡県飯塚市立岩遺跡(中期後半)
  - ⑦ 福岡県春日市門田遺跡(中期後半)
  - ⑧ 福岡県春日市須玖岡本遺跡(中期後半)
  - ⑨ 福岡県太宰府市吉ヶ浦遺跡(中期後半)
  - ⑩ 福岡市西区槌渡遺跡(中期後半)
  - ⑪ 長崎県島原市三合村遺跡(中期後半)
  - ⑫ 佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡(中期後半)
- 弥生後期
  - ⑬ 佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡(後期初頭)
  - ⑭ 福岡県甘木市栗山遺跡(後期初頭)
  - ⑮ 福岡市西区宮の前遺跡(後期終末)
  - ⑯ 福岡市東区唐原遺跡(後期終末～古墳前期)

26 絹を出土した弥生遺跡の分布 布目順郎『絹と布の考古学』, 雄山閣, 1988年など

(異論) 絹の出土が北部九州に偏重していることについて、佐原真氏は北部九州では甕棺埋葬であり、人骨が直接土に触れることがないため人骨が残り、従って、人骨に付着した絹織物も多く発見されることになり、北部九州での出土例が多くなると言っている。

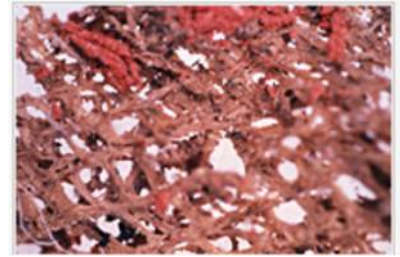
【参考】 弥生人骨発見例数： 北部九州＝数千 ⇔ 畿内＝数十

この論議は、絹の出土分布が邪馬台国の位置を裏付ける論拠に関連したものである。

(3) 弥生絹の出土状況

弥生絹は、①銅剣や鏡などの副葬品に付着した状態で出土、②遺体を絹で包んでいた絹が、人骨に付着した状態で出土し認識される。

一般に、①でみられる絹は目の詰まったもの、②では透目(すきめ)のものが多く。吉野ヶ里遺跡では、一つの甕棺から多種類の絹が見られる。透目絹には染色されているものと染色されていないものが見られる。前者は被葬者の着衣、後者は帷子として着せられたものと考えられる。(右の写真は、吉野ヶ里の甕棺墓から出土した透目絹)



染色には、経糸に日本茜、緯糸に貝紫が使われていることが判明している。

(4) 弥生時代の布の織り密度

時期	資料数	織り密度 平均数 (1cmに対する織糸数)
弥生前期	3	21.7×13.7本
弥生中期	48	16.1×9.0本
弥生後期	85	17.7×9.1本
唐古・鍵遺跡出土布(弥生中期初)	5	25.8×16.2本

出典：『唐古・鍵遺跡第21・23次発掘概報』

布目順郎著「唐古・鍵遺跡出土の繊維製品について」 から抜粋・転載

唐古・鍵遺跡では、火を受けて炭化した大麻製繊維が発見され、織りが緻密で縦糸や横糸の一部に併糸(あわせいと)が使われていることが検出され、当時の布としては高級品であったことが判明した。現代の綿織物の糸の密度と比較しても遜色ない織物だったことが判る。(下表参照)

【参考】 現代の繊維の場合

出典： 山形大学地域教育文化学部「New Tightness Factor による織物構造の解析」より抜粋し、平織部分のみ転載

サンプル名	材質	織物の種類 (組織名)	縦糸の太さ (tex)	横糸の太さ (tex)	縦糸密度 (本数/cm)	横糸密度 (本数/cm)
◆ W-W-1(p)	毛	平織	25.6	22.5	27	27
■ W-PP-1(p)	ポリプロピレン	平織	53.6	24.3	12	15
▲ W-C-1(p)	綿	平織	15.1	15.3	27	27
× W-S-1(p)	絹	平織	8.9	25.7	43	37
* W-N(6)-1(p)	ナイロン	平織	8.8	8.9	23	16
● W-N(66)-1(p)	ナイロン	平織	7.6	7.9	23	17
+ W-Ace-1(p)	アセテート	平織	8.9	12.6	20	29
Ⓟ W-P-1(p)	ポリエステル	平織	9.3	9.4	20	16
Ⓡ W-R-1(p)	レーヨン	平織	8.2	15.2	21	14
Ⓥ W-V-1(p)	ビニロン	平織	22	20	26	23
▽ W-Po-1(p)	ポリノジック	平織	17.3	16.5	34	22
⊙ W-Ac-1(p)	アセテート	平織	8.9	12.6	20	29
○ W-Cu-1(p)	キュブラ	平織	16.2	15	30	34

(5) 絹が出土した古墳時代前期遺跡の分布

古墳時代前期の14の遺跡からは、  
37種類の絹が出ている。(右図参照)  
絹はすべて平織である。

府県名	遺跡数	種類数
福岡県	3	7
奈良県	2	2
京都府	3	4
島根県	4	12
石川県	1	10
富山県	1	2
合計	14	37

絹が出土するのは、古墳時代の中期以降である。『日本書紀』には、雄略天皇7年に錦織工人が渡来し新しい錦織技術が半島から伝えられたという記述がみられる。

『日本書紀』原文：“以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・晝部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等”

解釈：新漢(いまきのあや;新しい渡来人の意 百濟系) 5つの部民(べみん)として、陶部(すえつくりべ)＝須恵器作り、鞍部(くらつくりべ)＝馬具作り、晝部(えかきべ)＝絵師・彩色師、錦部(にしごり)＝織手、特に高級織物師、譯語(おさみ)＝通訳



33 絹を出土した古墳前期遺跡の分布 布目順郎『絹と布の考古学』雄山閣、1988年による

【一口メモ】「錦」の語源

現代、「錦」は金銀糸及び種々の色系でいろいろな模様を織り出した、美しい厚地の絹織物とされている。その語源については、一説に「二色(にしき)」がある。『和語私臆鈔』(本寂著 寛政元年)には、錦は二色であり、赤白の二色を言うが、広くは種々の色があると説明している。また、『倭訓栞』(谷川士清著 安永6～明治20年刊行)では、丹(に)、白(し)、黄(き)、つまり赤・白・黄の色系で織ったものとしている。

【参考文献】

- ・『魏志倭人伝の考古学』佐原 真 岩波書店 2003
- ・新訂『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳 岩波書店 1985
- ・『海でつながる倭と中国 邪馬台国の周辺世界』檀原考古学研究所附属博物館編 神泉社 2013
- ・『倭人の絹 弥生時代の織物文化』布目順郎 小学館 1995
- ・『唐古・鍵考古学ミュージアム ミュージアムコレクション VOL1』唐古・鍵考古学ミュージアム 2007
- ・『日本大百科全書』、『広辞苑』、『新漢語林』

[日本書紀、全文検索 \(seisaku.bz\)](http://seisaku.bz)

[日本書紀・現代日本語訳\(完全訳\) | 古代日本まとめ \(kodainippon.com\)](http://kodainippon.com)